昭和 45 年 10 月 9 日(金)

はじめに

日記用として山小屋へ持ってくる。前の山小屋日記がまだ少し残っているので、当分の間　それを使用してください。山小屋日記 No２が無くなってしまったことは残念である。これからは決してそのようなことの無いようにして、みんなで大切にしましょう。現在、第１巻と第３巻、そして第４巻になる予定のこのノートが置いてあります。

ツマンネーこと書いてしまったな。

昭和 45 年 10 月 13 日(火)

アメー！　　丸山純、岡戸　小屋に来る。岡田さんの稲刈りの手伝いが雨で延び延びになってしまって、今日で帰ることにした。今、岡戸と２人で紅茶を飲みながら、これを書いている。外は雨。ガスが出て景色がはっきりしない。寒くなった。昨夜は岡田さんの旅館で岡戸と２人で話していた。話の内容は略すが、自分も４年になったのだなーと、つくづく思う。そろそろ俺も身を固めようか、なんて考えるようになった。就職することがこんなにイヤなものとは知らなかった。山小屋に来てホッとした。今日中に東京へ帰る。

丸山純

９時４０分ごろ、ぶらりと山小屋へ。一雨一雨ごとに妙高山がその衣替えを急いでいる。先週の土曜にはそれほどでもなかったけれど、雨が上がって、日曜には驚くほどの赤い裾野をはだけだした。今が紅葉の全盛期。今降っている雨が止んだら、まっかな真っ赤な紅葉に、秋の深まりを感じるだろう。岡田さんの稲刈りも今日で終わって、あとは脱穀だけになるという。秋の刈り入れの手伝いも３年目。オレも３年生になったのだと思う。稲という植物を左手でおさまえて、カマでもってサクサクと刈る。ふと見上げた妙高山の艶やかさに、見とれてしまう。そして思う。３年前にＹＷＶに入り、偶然探し当てた　ふるさと。俺には妙高があるのだとつくづく思う。実験があるので帰らなければならん。大学祭の時こそ２人で来ようと思う。

(岡戸)

10/13、プロパンガスを予約してきた。10㍑を２本、もしかすると　今のより　小さいヤツかもしれない。急に帰ることになったので、よく聞かないで　一番小さいのを　と　頼んじゃったから　ユルシテネ。

岡戸

昭和 45 年 11 月 1 日(日)

山小屋はガスの中、その中で和信が仕事に来てました。窓、戸がつきました。あとは畳が入ればＯＫです。午後になってやっと晴れました。でも日が暮れたらまたガスってきました。いろいろな人が来るという噂があったのに、結局は一人です。久しぶりにのんびりとノートに向かいます。山小屋も出来てからもう２年になります。早いものだと思います。寝具をそろえてもっともっとみんなに来て貰いたいものです。１１月の声をきいた笹ヶ峰はさすがに静かでした。山小屋備え付けにしたアルバムは、家にあった写真を適当にかき集めて持ってきたものです。そのため、かなり登場人物に偏りができちゃいました。機嫌を損じられた方は、どうか悪しからずご了承下さい。最近は、ワンゲルとのつながりが、この山小屋でしかない、それだからこそ、この山小屋に来るのかも知れない。残雪期に、紅葉の時期に、そして雪の降る時に。

H.Inoue　井上肇(3)

昭和 45 年 11 月 2 日(月)

夜中にガスが晴れました。久しぶりに天の川にお目にかかれました。一人妙高にでかけました。雪の多さにびっくりしています。林道を上ってカナメに出ました。まだ人に会いません。大谷ヒュッテを越えて天狗堂に出ました。まだ人に会いません。妙高の頂上です。すれ違いに３人パーティーが二つ下ってきました。頂上は立った一人の山になりました。下には雲がウロｔｙロしているけれど、ピークはみんな雲の上です。あまり見えすぎてよくわかりません。魚沼三山が見えているのかしら。あれは谷川あたりかな、志賀の山々を越えて、その先は八ツ？富士？南？中央？　北アルプスは雪を載っけて見事に連なっています。下りかけたら五人パーティーとすれ違いました。雪の長助池でひなたぼっこをして、黒沢池から笹ヶ峰へ下り、終バスで戻ってきました。今日は畳屋は来てくれませんでした。ワンゲル仲間は、いろいろと思いがけないことをやってくれ、また、素敵な言葉をしゃべってくれます。小生の勤める工場には、月一回発行される新聞があります。そこに季節感を折り込んでワンゲル仲間の言動を適宜載せることにしました。そのいくつかをここに収録しておきます。若干の言葉が違っているかも知れません。その辺は大目に見てください。

井上肇(3)

《その１》”九月に”（９月のおはなし）　底抜けに健康なのか、それとも馬鹿なのか、ともかく彼女は私の友達の一人です。９月になると、彼女は鎌倉に行こう

と言うのです。梅や水仙で名高い寺の境内に、彼岸花が咲き誇り、梅や水仙の季節より素敵だと言うのです。９月になると、すじ雲やうろこ雲が空高く浮かびます。彼女はそんな空を眺めろと言うのです。人が空を飛んで以来、宇宙からの地球の写真が見られるようになりました。彼女はそれを言うのです。空高く行く雲を眺めていると、雲の向こうに地球が見えると言うのです。
《その３》”木枯らし”（12 月のおはなし）12 月は木枯らしの季節です。それだけに空が澄み、それだけに星がよく見えます。丘を下りながらのことでした。「あの木に引っかかっているのが大犬星のシリウス」「うん」「その上の四角の中に点が三つあるのがオリオン座」「うん」「その上の五角形が御者座」「そんな上の星、言わないで」「どうして」「だって、上向くと　首が寒いもん」
《その４》”雪の年賀状”（１月のおはなし）雪は天からの便りだと思います。さて、話はちょっと遡って、秋の休みから始まります。月の光で茶色く輝く岩山から、色織りなす樹林帯へと下ってきたときのことでした。ある子が１枚のの黄色のハート形の葉を拾いました。「私のハートは何色かしら」「緑色じゃないの」「灰色かもね」　その夜、山小屋でその子は、私のハートはブルーだ、ブルーだと泣きました。そして、雪の降る正月、１枚の年賀状がその子の元に舞い込みました。「今年は貴方のハートが赤くなりますように」
（この様な文を工場新聞に載せるとき、思い出は、焼けてしまった鎌倉の学芸学部の部室、鎌倉の裏山、清水が丘、上高地の西穂に小梨平、西丹沢の箒沢、この妙高なえな小屋などを巡り、長谷部君子、岡崎美奈子、山本紀子、下村弘道、松本弘道、岡本幸雄、上島雄助、楢原真理子、桂原直子、長坂冨美子、宮城素子、山川隆、金田精彦、白井信行、畑中誠などが、その場所に登場してくるのです。）

　No２の山小屋ノートが無いんだね。No２の山小屋ノートは、小生が持ってきたんだっけね。去年の９月のことよ。多分、ノートがオーバーフローっしちまってんじゃないかと、持ってきたら、その通り、そのちょっと前に来た連中は仕方なく、ノートの裏カバーに書いていた。Ｎｏ２のノートは９月の彼岸から始まり、１０月の、大阪から来た三宅君のことや、１１月のＯＢ山小屋集会や、冬の事柄が書いてあったよね。小生も２月８日頃、岡田さん宅に泊まりながら、スキーを履いて、それまで全然知らなかった男一人、女３人を連れてここに来て、ノートに、ラーメンごちそうさまと書いといたっけ。それが、５月連休に来てみれば、影も形も無い。５月の連休に入っていた森君も、また宮崎紘ご夫妻も、手持ちぶさただったことでしょう。

H.Inoue

昭和 45 年 11 月 3 日(火)

下山いたします。今日は昨日と同じく小春日和です。床にワックスをぬった方がよさそうです。

井上肇(3)

昭和 45 年 11 月 5 日(木)

ローソクの光の中で、そして側らに　あったかあいストーブにあたりながら、やっとできた２階をながめて、やっと「一人前になったナー」と感じたのです。今度で丁度、山小屋に来るのは、１０回目になりました。その「できあがった山小屋」を、初めに使えるなんて…。素直に書きましょうか。「アタリメーダ。オレタンチンが一生懸命やったんだから」。　でも、それはどうでもよいことでしょう。なにしろ、使用可能条件をなんとか越えたのではないですか。これで少しは、人間の生活ができる目処がついたのでしょう。ふと、天井を見上げて、もう露骨というか、ダイナミックと言うか、迫力のある、けれど、余りと言えばあまりにも芸術的な空間は消え、代わりに２階という仕切りができました。畳も入り、今まで行くのが難しかったベランダの上に、目をつぶっても行かれるなんて。　最初、山小屋委員会で改修工事の計画を練った時、こんなにりっぱになるとは、想像も出来なかったのです。ちょっと高いかなとも思われる２３万円ですが、出来栄えは素敵だナ、と思います。一つ一つ良くしてゆくことが、これからは、山小屋の肉になるのでしょう。ローソクは燃えて無くなってしまうけれど、山小屋は一つ一つ大きく立派になってゆかなければならないのかしら。山小屋が大人になるには、まだまだこれからなんだろうね。でも何故か、うれしいんです。でも間違えては困ります。Ａと一緒だからだと思うけれど、でも考えすぎても困ります。いろいろあるのですから。でも・・・。でも、安心しました。

オガ

　部費を使い込んでまでの改修工事、どうか無駄になりませんように。これを踏み台に、本当に本当に、これからなんだナー、と思います。　ところで、あっちこっちから、マキが足りないのではと言われますけれども、これ以上は無理だと思います。薪 100 束を杉野沢の京山荘から買いましたけれど、運賃込みで 4500 円かかりました。それに、夏に現役が入って、回りの木を切ったのだから、今度の修理代のことを考えて、限界だったのです。その分、一生懸命薪作りをしたのですけれど。マキの節約をして貰う以外にないと思います。

現役　山小屋委員長より
文責　石川

山川君に連れられて、始めてこの山小屋にやってきました。横浜で話に聞いていたほど不便な山奥ではなかったので一安心しています。大きな荷物をかついでリフトに乗るなんてことは　あまりない私にとって、この山小屋での生活は、素晴らしい思い出になるかも知れません。感謝しています。これからも、できたら是非、おじゃましたく思っております。どうかよろしく。でも、残念なことが一つだけあります。それは、国際ゲレンデの斜面がなだらかすぎて、かえって滑りにくいことなのです。うまく滑れるか滑れないかの瀬戸際の場所で、自分の技術の全てを出してこそ、上達していくのでしょう。でも、長距離のダウンヒルはとても快適です。以下、簡単に自己紹介しておくようにと山川氏から命令下る。従う。

本名　石川信。生年月日 24.10.10（体育の日、21才)。現住所・妙高高原横浜国大ワンゲル山小屋。昨日までの住所、横浜市金沢区六浦町。現在は早稲田大学法学部三年在学中？　以下割合させていただきます。即ち山川氏の高校の時のできの悪かった仲間です。見るに忍びないので、山川氏が温情を出して私の面倒を見てくれているというわけズラ。大学でのクラブは法律の研究会と　企画研究会（主にコンサートの主催）に入っていますが、東京に出掛けることも、この年になると少なくなってきて、必然的にクラブから睨まれつつある様です。アルバムを見せて頂きましたが、苦しい中にも楽しさが、クラブに漂っていて、素晴らしいことだと感じました。いいですね。僕もそのようなクラブ・先輩・後輩・同窓生に恵まれていたら、こんなに変ちくりんな男にならなかったろうに、と残念です。国大も早稲田と同様、大学内の矛盾ー紛争でいつも大変ですね。みなさんと、そんなことも含めて、いろいろ話し合いが出来たらうれしいです。青春は、くだらない悩みの多い年、そんな悩みを聞いてくれたらいいな。ではひとまず終わらせて頂きます。

石川（早大）

昭和 45 年 12 月 22 日(火)

１日中気温０℃　雪のち雨のち雪

総重量５０kg以上を持ち、１７日間滞在の決意を秘めて山小屋に入る。ところが、着いてみるとシールの後がちぎれて無くなっている。これにはがっくりきた。中に入り、早速２階に上ってみる。さすがさすが、けっこうなものです。しばらく２階の窓から外を眺めた。１階も広くなっていて　またけっこう。これでこそ、苦労のしがいがあったというものです。チラチラ降っていた雪が雨に変わり、今日は滑るのをやめる。薪を使うともったいないので、石油ストーブだけにする。夕方、雨が止み大粒のぼたん雪になったので、ワカンを着けてシールの後を探しに行った。いくら行っても見当たらず、とうとうスキー場まで入り、ようやく見つけた。後３０分遅かったら、一寸ひっかいたくらいでは見つからなかったろうし、それ以前に、何処を通ってきたか分からなくなっていたことだろう。帰りはのんびりとワカンの練習をしながら帰る。雪を上にきれいに弧を描いて、振り返ってみて、さすが山川氏と感心する。夜、金の計算をする。帰りの交通費を差し引いて、自由に使える金は５００円も無いことを知ってガックリした。

山川

昭和 45 年 12 月 29 日（水）　雪、ガス（濃）

朝－１℃昼～夕方－３℃内外

６時起床の予定であったが、気が付くと９時だった。これは我々のおおらかな人柄を表している。今日こそは滑ろうというので雪を突いて出掛ける。ガスが濃く、小屋に帰れるかどうかも心配なくらいであった。私はリフトに乗る金がないので、石川氏に買い出しに行ってもらう。シーズン前には快調に滑ったのだが、今日はどうも調子が出ない。よく転び、よく濡れた。飯は山荘笹ヶ峰で、何も注文しないでお茶を飲み、握り飯を食べた。４時まで滑る。小屋に帰ってよほど薪を使ってしまおうかとも思ったけれど、石川氏がクリスマスイブまでとっておこうというので、またまた石油ストーブで我慢する。エラインだワー。昨晩に引き続いてまた、コイコイをする。今晩は私が勝った。

（トピックス〉

①石川氏は、雪上車のアンチャンの言葉を信じて、４時少し前、下まで滑り、帰りは歩く羽目になりましたのヨ。

②山川氏、名城大の女の子に声をかけられ、ボーゲンを少し教えてやった。

③シールの修理を教える。少し短く、細引きを足す。

山川

又おじゃまします。　今朝起きてみると　局地的に（日本海側）雪が降ったとかで、昨日の小便した場所が判らなくなっている。また同じ場所でやらかしてやろうと思ったのに残念だった。　朝飯を食う。内容、即席ラーメンに昨日の残り飯を入れる。通称「ラーメンご飯」と言うそうな。味…。一日この小屋で生活して、大分様子が分かってきた。水もすぐ作れるし、何の支障もない。自宅にいるよりはるかに快適。ただ、夜一本のロウソクの光だけで、炊事から、トイレから、花札までを消化しなければならないのが　痛い。ランプはちょっと手を加えなければならないとかで、使っていない。実にキャプテンらしく節約をしている。りっぱ。もう一つ、電話がない。これでは彼女のおやす

みの声が聞けないではないか。諸君、こんな事で良いのだろうか、きっと良いんだもんね。ワンゲル氏は北村氏を除いて、彼女が居ないんだろうね。（北村氏のうわさ、早稲田まで風に飛ばされてくる。）　昨日はスキーが出来ず。今日初めてゲレンデに。雪質は最高。ワックスは青を中心にいろりお塗ってみました。この時期では青一色で良いようです。外は白一色、頭の中は清一色。　夜～っ。さむい。石油ストーブ一本。でもあるだけまし。冬の横浜の夜の山下公園よりは断然良し。天国と地獄のちがい。ちなみに山下公園が天国、山小屋は地獄。　酒がない。酒がない。酒がなーい。ザックを開けたらおかあさん、酒が入っていないじゃありませんか。酒無しで夜の夜男二人でなにをしろというのか。俺いらと山川氏は友達でこそあれホモダチではなかったはずだが・・・（記憶を辿っているところ・・・）　２６日になればワンゲル氏がワンサと入ってくるらしいから、それまで待ってて、死ぬほど酒を飲んでやろうかしらん。クリスマスパーティーも出来ませんね。酒無しでは。　そういえばもうすぐクリスマスだそうです。クリスマスって何でしょうか。ジングルベルって何なんでしょうか。俺いらははたと考え込んでしまいます。テレビやラジオではクリスマスの話題を取り上げ、街では大売り出しかなんかやってます。とすると、マスコミが、経済界が、即ち日本帝国主義が暴利を得んが為にクリスマスを作ったのでしょうか。だとすれば諸君、我々は一致団結して人民を無視するクリスマスを粉砕しようではないか。クリスマス粉砕～。日本帝国主義粉砕。そう考えれば、クリスマスなのに酒が飲めない　なんて悲しくなることも無くなるんだ。ホッ。　夜、ローソクの光を浴びながら、ふと考えるんだけど・・・。麻雀が出来ないなんて。こんなに暇な時間があるのに。法律本を持ってきたし、やらなくてはならない勉強なんだけれど、ローソクの光ではとてもそんな本なんか読めないし。でも麻雀なら出来ないことはないな。ローソクを４等分すればいいんだもんね。真ん中に１本、そして、それぞれ３本。１本足りないけど（俺いらはいらない。何故って？諸君、考えてもみたまえ。何故ジャンパイは放ってあるのか。でも、ワンゲル氏たちは麻雀は禁止ですから。山川氏曰く「時間にルーズになって仕事を消化しないからだめなんだ。」きっと山川君が出来ないからなんだろうね）。　今入った情報によると、ワンゲルは、特別に麻雀を禁止しているわけではないんだそうです。ヨカッタですね。この上ないことですね。やりたいですね。２６日以降も居ようかな。誰かつきあう人居ませんか。と呼びかけても返ってくる言葉無し、宛名無しの文章を書く、このわびしさ。でも、合宿を予定されているからだめズラ。キャプテンに叱られても、又都に帰れなくなっても（お金）当局は一切関知せず。そのつもりで。やりたいな。やりたいな。名城大のおねえちゃんとマージャンやりたいな。

寝る前に外に出る。夜空の星が素晴らしい。こわいほどだ。畏怖感がある。雪が舞い降りてくる様に見える。すばらしい。ワンゲル氏が山に登る気持ちももわかる気がする。良い思い出になる。東京ではとてもとても。今夜は気持ちよくぐっすり眠れそうだ。明日山川氏は笹ヶ峰の方にアタックに出かけるそうだ。無事、健闘を祈ってやまない。　疲れが出てきた。今日、最後にリフトに乗り遅れて（４時前に止めてしまうんだ。そんなことがあって良いのか。国土計画のバカめ。ノドから手え突っ込んで…もう古いな・・頭に来た）山川氏の待つ第２の終点まで駆け足で上ってきた。日も暮れる寸前。スキーで肩が痛いし、足はスキー靴で、心臓は高鳴るし、目はかすむ、おかあさーん。でもこれも自分が悪し。以下時間の都合で省略します。おやすみなさいませ。

石川（早大）

昭和 45 年 12 月 24 日（木）

朝です。朝はどこから来るのかしら。谷岡やすじが起きたとたん、全国的に朝～っと決めるのではないかしら。谷岡やすじめ、もっと遅く起きろ、眠くて眠くて。外に出てみると風が少々ある。曇っている。天気図と照らし合わせて考えると、今夕若干吹雪くかも知れない、とのこと。山川氏はそう言って笹ヶ峰の方向に出向く。やるんだわア。時はちょうど９時。一緒に出かけようかと思ったけれど、山スキーなしでは苦しいのでやめた。　山小屋で一人になる。一人になるとさて何をしようと考え込んでしまう。スキーにワックスをかける。青一色。ローソクで溶かして厚めに塗った。それも終わると・・・手持ちぶさた。・・・ちらっちらっと彼女のことが頭に浮かぶ。昨晩（じゃなかった今夜・・でもなかった今朝方）寝ていて彼女の夢を見たってばヨー。さすが純愛ムードズラ。ではスキーに出かける。山小屋に誰も居なくなったしまうけど、火事にならないかなあ、火の用心、鍵の用心、女に用心。　３時です。なぜこんなに早く小屋に帰ってきたのか。第３リフトから直滑降で走っていますと、下の方で、上も見ないで、横にへたくそに横切っている方が居ました。ちょうど折りもおり、私がまっすぐ下りていくと、二人の交点が時間的に一致しますのでまずいと悟った私は、若干コースを左に変えました。するとどうでしょう。そこは将に新雪、スキーがとられるじゃありませんか。その上、スピードは抜群です。どうなったでしょうか。そうです。ものの見事に転倒しました。そのすごさと言ったら、言葉では言い尽くせません。挙げ句の果て気がついてみたら、鼻の上一カ所とあご一カ所の皮が少し無くなって血が出ていました。その上、頭からゴロンゴロンと２，３回転したので、首の筋を完全に痛めてしまいました。首が動きません。困りました。馬鹿になりはしないでしょうか。

心配です。やっとの思いで小屋まで帰ってきて、今首に冷湿布をしてマフラーを巻き付けたところです。まず、ひどいものです。これが調子者の末路とかいうやつでしょうか。皆さん絶対に気を付けてください。なお付け加えておくと、昨年ちょうど今頃私めは八方尾根にて足首と膝をダブル捻挫しています。一全くの調子者、今度は足を気にしていたら首をやられました。ひどいものです。絶対気を付けましょう。生唾を飲むと首に響くので乱筆になりましたがご勘弁を。 なお、山川氏はまだ帰ってきていません。心配です。不安です。一人で死んじゃうのではないかしら。 ５時近く、山川氏帰屋、ストックを途中で１本落としたそうな。疲れたそうな。ごくろうさんでした。　　今はじめて大ストーブを焚く。クリスマスイブを祈念して。私の捻挫を記念して。詳細は後ほど山川氏からどうぞ！なおマスコミ関係はご遠慮願います。ネタにされると彼女にみっともないからだそうです。彼女って誰かにィー。これも山川氏からどうぞ！　　なお、女性からのご質問はやめてください。ワンゲル嬢に彼女のことを知られたくないそうです。

石川

気温　-１℃

比較的暖かい。小雪チラチラ。上空の雲は、西の方からわれて、かなりのスピードで飛び去る。６時に起きるが、支度に手間取る。石川氏は飯を食ったらまた寝てしまった。小屋の前からシールを付けて出発。シールを付けると、スキーが意外に重たいのヨ。三本木手前で暑くなりストリップをやって、ウールのシャツを脱いでしまう。二，三日前に誰か通ったような跡がついている。池の峰から一応下りのような感じになったのでシールをはずすが、スキーは一向に滑らない。ストックで押して滑ったが、腕が疲れてしまい、歩いていくことにした。　笹ヶ峰に着きメシ。空模様があやしくなり始め、時々、かなり強い風が吹く。雪煙が舞いちょっといい気分。乙見山峠の辺りがハッキリ見える。もう一丁行ってやるかと思い、乙見山峠方面に滑り降りる。テン場にも、ピッケルの練習にも絶好の場所があったが、沢を渉らねば　そこから乙見山峠へは行かれない。慎重に探す。兎が渉っているところがあったので、行ってみる。ピッケルを小屋に置いてきたので、下の様子がよくわからない。スキーをはずし、ストックで突いてみたが、まずわたれそうである。雪がはがれている所から、丸木橋のようなものが見える。一歩二歩三歩で、丸太に上に着いたとき、二歩目が崩れる。慌てて丸太の上の雪にかじりつくが、この時、ストック一本流されてしまい、流れと共に雪の下にはいってしまった。そこからフテクサレテ　ストック一本で帰る。能率が上がらない上に、雪が降り出した。風も強くなってきた。一応飛ばしてみる。ダムの脇を通り（往きとは違う道）、京大ヒュッテ脇に出る。どうやら吹雪にはならない様子なので、飛ばすのは止めて、歌を歌いながら帰る。誰にも会わなかった。腹が減ってやりきれずチョコレートをかじる。池の峰でシールをはずし小屋へ。途中３回ばかり転ぶ。良く歩いたので、あまり足が言うことを聞いてくれない。おまけにストック１本では、バランスも何もあったものではない。小屋に着くと、もう石川氏が帰っていた。まだ滑っているだろうと思っていたのだがーー。私の時計では１６：００．彼氏は顔にベタベタ絆創膏を貼っていた。ところで私の靴であるが、今回初めてなのに、靴擦れとかあたるところがあると言う噂はまるで聞かない。言いたくはなかったんだけど、やっぱり高い靴はちがうネー。

山川

昭和 45 年 12 月 25 日（金）

今日は一体何曜日でしょうか。少年サンデーとマガジンが出る日ですね。この頃まんがも高尚になってきて、学ぶところが多いズラ。大学生たるもの、漫画の２冊や３冊読まないと教養疑われるようになりました。住み難い世の中です。山川氏に山の歌を教えて貰いました。いいですよネ。ワンゲル氏はみんなロマンチストが多いらしい。純情派ですね。歌を聴いていてそう思いましたよ。今日は二人とも起きたのは遅かった。きっと昨日一生懸命生きてきたので、疲れていたのでしょうか。私は、寝ていても首が痛くて熟睡は出来ませんでした。良くないことです、眠れないことは。小雪がちらついていて、今日も特に寒そうですよ。寒いお天気ッテ嫌い。１２時を過ぎてしまったのに、まだ小屋にいるのです。きっと、小屋の居心地が良いんでしょう。皆さんの苦心作に頭が下がる思いです。決してゴマスリではありませんが　オセジですからそのつもりで！

石川（早大）

雪　-4℃　今日はいくらか寒い。作っておいた水が初めて凍った。１２時過ぎまで小屋でのんびり過ごし、午後から出かける。首を痛めて無理を出来ない石川氏からシュテムクリスチャニアを教えて貰う。何とか様になりそうな所まで漕ぎ着けた。４時少し前、もう第３リフトは停まったので帰ることにした。荷物を背負いオーバーズボンを履いた女の子が居たので、武庫川女子大だろうと思い、待っていたが下に滑っていってしまった。第２リフト終点から斜滑降で飛ばす。ｽｷｰの跡がついていたのでその通に滑った。それが途中でパッと消える。しまったと思ったときは既に遅く、黄色いシミの上をスッと通り過ぎた。石川氏はまだ武庫川に未練があるらしく、国大のナエナ小屋人が入っていることを示すために、ココにオシッコしようという。我々はそこでオシッコをした。雪が音もなく降る。ち

ょっとたてばこの跡も消えてしまうだろう。ふと、人生のむなしさを感じる。そこから向きを変えて、山小屋へ。その時私のはねのけた雪が石川氏のオシッコの跡にかぶさり見えなくなってしまった。これでは武庫川の女の子は、石川氏がなえな小屋に居ることに気付かないであろう。私は石川氏に悪いことをしてしまった。

山川

昭和45年12月26日（土）

この小屋ともお別れの時が来てしまいました。早いものです。とても楽しませて貰いました。飢えと寒さと欲望に打ち勝っての５日間・我ながらよく頑張ったことだと感心せずに入られません。とても良い思い出になることでしょう。　只今氷点下１０℃近く、かなり寒く、ストーブのそばから１メートルも離れると手もかじかみ、息も凍り付きそうです。既に食料は「水気」のあるもの全て凍り付き、まして生きとし生くるもの全て活動を停止しているかのようです。寒いのです。死んでいるのです。生命体と言えば、ほかほかと暖まっている私の首と太陽と、音を立てて燃える石油ストーブとです。 生きているものは自己発熱します。太陽は毎日、確実に姿を見せてくれます。生命体の中で一番の強者（つわもの）だと思います。偉大であります。自然界の法則とは言い、驚きに余りあります。神です。太陽は雪を溶かし、光を与え、人々の光をも解かしきり、勇気と希望とを与えてくれます。恵みの神。　こうした自然の中で、山川氏と二人きりの変な関係の生活の中で、いろいろ学んだ点がありました。山川氏と語らいの中から彼の人生観・世界観・女性観ｅｔｃを知ったのはひとつの大きな喜びであります。人間同士数多く顔をつきあわせていても、相手の本当の気持ち（本当に近い気持ち）を惜しげもなく捻出し合い、徹底的にけなし、相手を絶望に陥れ、自分も又絶望に当面し二人して涙を流す。そしてまた励まし合い明日に向かって何とか生きていく。－－－そんな、実に弱い人間になれるのは　そう　あるものではありません。本当に嬉しいことでした。山川氏に感謝すると共に、そうした場であった、この山小屋にもお礼を言わねばなりますまい。ワンゲル氏一同、こうした機会に満ち満ち溢れていることを思うとうらやましくて仕方がありません。是非、人間同士の語らいの機会が多くありますよう、せっせとこの小屋に通ってください。決して男同士のマスタベーションではありますまい。また、そうだとしても、それだけで終わらせたくはないものです。　大学生時代というのは素晴らしい時期です。青春は確かにバイタリティーがあっていいものです。青春時代に一体その人は何を考え、又何をしたか。その事によって彼の死に方が決定的になるでしょう。結果が問題なのではありません。経過が問題なのです。ある事件に直面しても、新聞記事から事実の探索だけが必要ではない。むしろその背景がいかであったか。それを知ることの方が数倍、その事件を知ることになる。決定的なことになる。現状を把握するに歴史を振り返ること無くしてあり得ないことも同じでしょう。

石川（早大）

何か啓示的な文章になってしまって申し訳ありません。首がまだ痛むので、きっとそれが頭にまで来て細胞をいじくっておかしくなっているのかも知れません。字の汚いのも寝ながら書いているせいばかりでもないのでしょう。許してください。　自分が都会というマスメディアの中で生活していて、実に他主的な不健康な生活をあくせくとしていたのかと思うとき、横浜に戻るのに一抹の不安を感じます。でも帰らねばなりません、残念です。しかし社会共同体の生活からいくらかでも離れて、一人、仙人の如く生きながらえていくというのは逃避の姿勢でありましょう。特に若い人にとっては、不健康な都会での生活の中に、どれだけ自分の健康を保ち、社会生活の義務を全うし、自分の意志で死んでいけるか、せいぜい一生懸命やってみたいと思います。まだまだ、この小屋で学んだこと、書きたいこと、いっぱいあるのです。プラスするノートを持ち合わせていないので、全部使ってしまうわけにはいきません。以下、思うままに雑言を少々して終わります。

俺いらの失敗例

１．　昨日の晩、二階に上がる階段から見事に暗闇の床に落ちました。わざとやったのではありません。

２．　リフト券を（４回分）どこか途中で落としました。拾った方には１割お礼いたします。

３．　首の筋を痛めたのは、もう前に書きました。あまり大きな失敗なので話になりません。あきれています。

４．　２階の窓から外を眺め、さて戻ろうとして頭をバーにガチンとぶつけました。誰だ、黒と黄色のテープを貼っておかない奴は！

５．　ワックスは、塗ればいいだろうと思って、火で溶かしてベタベタに塗りました。しかも、まだらに。そうしたら全然滑りません。摩擦のかえって・・・猿も木から落ちました。

６．　小便をしたい余り、夜に小走りに小屋を飛んでいったら、炉の所で足を踏み外して、痛いこと痛いこと。ここには、テープではなく夜光塗料を塗った棒を立てておきましょう。棒が立つなどということは、この小屋ではまず　ありませんから。

７．リフトが停まってしまって、第２から上まで歩きましたっけ。

目に付いた女の子の例

1．　　白い帽子をかぶった子、それも、帽子の先がケツの穴近くまであるんでガス。長いんです。太くはないけど。そうしてトンボメガネをかけていました。赤いキルティングでした。スキーはあまりうまくありません。スタイル６０点、フェイス７０点、総評　５０点。何故なら　出来もしないのにカッコばかり目立ちすぎ。
2．　　どこかの女子大のワンゲル員らしき子の一人　　スキーが抜群にうまいのです。きれいなパラレルで大きく優雅に降りてきました。あんな子に教わりたいですね。顔？　そんなのあったかな。そうだ、赤ら顔だった。男だったのかな。スタイル５０点、フェイス　５点、総評８０点。
3．　　.友達同士で来ていた子　　かわいいんだとても、焦げ茶のカーディガンじゃないセーターを着て、一人ゲレンデの隅に立っていたから、さっそうとその前で止まったら、そのとたん、彼女急いで滑り出して友達の方へ行ってしまったっけ。男仲間も居たな。あばずれめ。スタイル８０点、フェイス９９．９点、総評１２点。
4．　　ロッジでストーブにあたたりながら黄色い声を出していた子　　ちんちくりんで、ちょっとカワイイ。好きな方はどうぞ、ブルーのキルティング、でも翌日になってみたら、また違うキルティングを着ていた。きっとおしゃれなのかも。自信がないのかも。スタイル５０点、フェイス５０点、総評７０点。

どこか自信のない女の子って好きなんです。私は、そこら辺に落ちている枯葉みたいな女の子に惹かれます。クールな魅力にいかれます。そんな貴女が居たら、好きだよッてすぐ声かけてみたくなるのです。君、そんな女の子かい。－－－好きだよ。－－－そんじゃ君、後で我が家にＴＥＬして下さいね。山川氏から聞いて。遂に出来た、彼女ができた。ワンゲル員の彼女ができた。嬉しいなったら嬉しいな。－－－頭がおかしいね、－－－白日夢－－－しばしまえ－－－夢　　パチッ。ああ、うまかった？フィーリンググッド。
こんなこと書いていたらいつまでたっても筆が止みません。時間も来ました。本当は真摯な態度で終始一貫するつもりでしたが。これも私の一面なのでしょう。こんな事言ってる人が居たらきっと僕ですよ。声をかけてみて下さい。飲んでいるときかも知れません。勉強している時？かも。女の子と歩いているときだけは勘弁して下さい。君に取られたくないんですよ。　　この山小屋日記、随分と書かせて貰いました。おかげで彼女に手紙めいたこと、何一つ手渡しできなくなりました。勉強もできませんでした。でもこれで良いのです。とても楽しかったのですから。またいつか、きっと寄らせてもらいます。その時又、仲間にして下さい。彼女にも横浜国大ワンゲル部のこと、大々的に宣伝しておきます。きっと部室にラブレターが舞い込んでくることでしょう。　冬季の訓練、どうか元気にお過ごし下さい。風邪など引かぬように、腹などこわさぬように。そしてきっと良い年をお迎え下さい。－－ハッピーニューイヤー－－　山川氏、いろいろお世話様。又横浜に帰ってから！－－セブンスター一本吸わせて貰います　　－－早稲田大学法学部生－－

気温－８℃　晴後雪　久しぶりに晴れた。ここまで晴れたのは入山以来初めてである。気温は非常に低く、シュラフカバーの内側が真っ白に凍り付いていた。5時少し前一度目が覚めたのだが寝たら、次に目が覚めたのは７時過ぎていた。今日はみんなが入ってくる日なのに。後のことは石川氏に頼み、お茶だけ飲んで出かける。一気に杉野沢まで下ろうと思ったが、山スキーで行ったため、エッジがあまりよく効かず、エッジを立てるのにかなり苦労し、足が痛くなって途中で休んでしまう。岡田さんの家に着いたときは、みんな出かけた後。大急ぎで追いかけて、リフト乗り場で漸く追いつく。ここで少し荷物を受け取って後から行く。途中まで行くと、リフトの真下にどうも変な跡がある。そこから登っていったようなスキーの跡。それがどうもシールを付けているようであった。少し行くと純さんが滑ってくるので、声をかけると道夫が落ちたという話。また少し行くと村松が居て、鵜飼が荷物を背負って歩いている。リフトに乗っていくのは見たのに、何故こんなところを歩いているのかと思い、声をかけると、鵜飼も落ちたのだという。また少し行くと、村松のザックがリフトの下にドサリと落ちていた。全く惨憺たる状況であった。ＹＷＶ始まって以来ではないだろうか。今まで、よほど飛び降りようかと思ったと言う話は聞いたことがあるが、本当に飛び降りたり、落ちたりしたのは初めてではないだろうか。昼飯の時、石川氏がザックを背負って降りてくる。彼は今日、横浜へ帰る。昨夜も、その前も、彼と突っ込んだ話ができたことは嬉しかった。こういった話が出来たのは久しぶりだ。私は話し合いに飢えているようだ。　山小屋はとたんににぎやかになった。これから山スキー使用の冬山訓練が始まる。私と純氏と村松、小口、高木、鈴木、鵜飼、吉田の８名、誰も怪我などすることなく、無事終わることを祈る。

山川

昭和 45 年 12 月 27 日（日）

気温？　　昨日から大分雪が降る。新雪がおよそ３０㎝ほど積もり、小屋の前でも、膝くらい沈む。　　昨日のスキー訓練に引き続き、本日はスキーの特訓。転んでも良いように全員完全装備。シュテムボーゲンまでやるが、全員一応消化。しかし、どんなところでも出来るようになるには、まだ相当に時間がかかりそう

である。リフトを使って第２ゲレンデを３回滑り降りた。みんなスキーの魅力に囚われたようだ。午後から造林小屋と旧ベランダの雪かきをした。　明日はもうテントに入る。ストーブを使えるのは今晩までであるが、新しく針金を張り、物置から金網を見つけだして、ストーブの上に張った。これで、濡れたものもよく乾くだろう。　夜、話が弾んでしまい、１２時まで話し込んでしまった。みなもうごそごそとシュラフに入る。

山川

昭和 45 年 12 月 28 日（月）

快晴　－１０℃　一日中晴天。

午前中、スキー練習の後、午後から小屋の整理。この後、パッキングをして外に出て、幕営訓練、ワカンによるラッセル訓練の予定。スキーは皆上達した。

サトへ伝言

① トランシーバーの連絡時間は紙に書いておく

② 北側の棚の段ボール３箱には手を触れないように（個人装備、つなぎ用食料

③ もし一人だけで薪が勿体ないと思ったら、石油がたっぷりあるし、ストーブも簡単に使えるから石油ストーブを使うように。（使用法は１年の時と同じ。プライヤーで引っ張りながら時計回し）

④ スキー靴、尻皮等、濡れたものがおいてあるので、もしヒマだったら干して置いてほしい。

⑤ ワックスは、冬山訓練の共同装備だけれど、ご自由にどうぞ。

⑥

（以下 12/30 記、山川）

ワカンを着けてラッセル訓練をほんのチョボッとやったあと、テントをたてる。いざ雪の上となると、いろいろとドジなことが多い。８テンにキスリングを持って８人入ったので、非常に狭苦しく、寝るときは重なり合う位。位ですよ。水を作るのに苦労し、時間を食ってしまう。忘れ物を山小屋に取りに戻ったり、かなりひどかった。

山川

昭和 45 年 12 月 29 日（火）

雪の降る中をテントを畳み、パッキングをして、いざ出かけようとすると、村松のスキーのワイヤーが切れる。仕方なく純さんの分を回して貰い、純さんには普通のスキーにシールを着けて行って貰う。そんなことをしているうちに、９時になってしまう。池の峰の少し先までシールを付けて行き、それからは滑っていく。皆よく転ぶ。私は転ばない。吉田が特によく転ぶ。スキー練習の時に教えたことなど全て忘れて、重い荷物に必死に転ぶまいとしてへっぴり腰になって、ドテドテ転ぶ。昼少し過ぎに笹ヶ峰に着きテントを張る。その後は何もしないで、ひたすら食べる。

昭和 45 年 12 月 30 日（水）

４・６で起きて、パッキングの後、乙見山峠までは行かれそうもないので、笹ヶ峰周辺を歩き、そばの無名の山にとりつき、途中まで登り引き返して、山小屋に帰る。相変わらず皆よく転んだ。　山小屋はやはり良い。ストーブにあたりながら、のんびりと時を過ごす。もう私の主な役目は終わった。あとは、１月７日まで、スキーでもやっていれば良いのだ。今回、冬山訓練としては極めて不満足。やはりワンゲルも時の流れには逆らえないのだろうか。とても寂しいことだ。どうしても痒いところに手が届かないという感じである。　夜、池原氏、佐木氏、入山。

／山小屋で３回目の正月を迎えることになりました。夏はあまりこの辺りの山には登ったことがありませんが、雪のある時期はだいぶアチコチ歩きました。これからスキー登山をやろうという方の為に、この山小屋周辺の冬期のコースをいくつか紹介しましょう。

１．ツアーコース　　ツアーとスキー登山を分けることは出来ないかも知れませんが、ここではスキーとシール及び防寒具程度で行ける範囲ということにしておきます。

①池の峰（詳細略）
②笹ヶ峰牧場（詳細略）
③笹ヶ峰（詳細略）
④乙見山峠（詳細略）
⑤池の平スキー場（詳細略）
⑥大谷ヒュッテ（詳細略）

2.登山コース

①三田原山：山小屋より（詳細略）
②三田原山：笹ヶ峰牧場より（詳細略）
③火打山（詳細略）

昭和 45 年 12 月 31 日(木)

非常に暖かい。杉野沢まで行くと雨になった。本日高木、鵜飼　下山。久保田、山ノ井入山。　杉野沢で年賀状を出し、買い出しをしてから上に上がるが、リフトが混んでいて、かなりの時間を要した。午後、スキー練習。夜は、７０年の総括をしようと思ったが出来ず。紅白歌合戦粉砕、大酒盛大会を開く。小口の演説は聞けず非常に残念。少し歌を歌う。果ては、月光仮面、笛吹童子、赤銅鈴之助までいった。皆、歳がわかってしまう。　岡田さんのところで聞いた話だが、入山予定の左藤（清 12 期)が入ってこないのは、怪我をしたからだということで、多少心配。これで冬にこ

の山小屋に入った三年は私一人になってしまった。非常に淋しいことだ。今日で１０日目になる。大分、ヒゲが伸びてきた。入山以来一度も歯を磨いていない。新年を祝って磨こうと思ったが今更改まってやるのもシラケルような気がして、どうもやる気がしない。尚、純さんは今日、久保田を迎えに行くのに、昨夜、歯を磨いて行った。やはり、人生には刺激が必要なようだ。

山川

昭和46年１月１日（金）１３名

下界でも山小屋でも、全国的にお正月。白神(逸夫７期）氏とその同僚の佐々木氏、それに三浦正継(9 期)氏入山。お正月気分などまるでない。ただスキー場がやけに混んでいるだけ。明日はスキーにどっと入ってきて、この山小屋始まって以来の大人数になるだろう。昨日、今日と酒が出るが、私はまるで飲めない。ダメなのかしら。体が受け付けない感じ。ああ、私は酒にも見放されたのでしょうか。

山川

昭和46年１月２日（土）　26名

山小屋の中に沢山の人が居ます。人の声も沢山聞こえてきます。今日下山した人、三浦さん、佐々木さん。今日入山した人、スキー隊Ｌ．高橋（秀雄 11）さん、桜井（謙一 11）さん、榊原（福司 11）さん、赤松（明 13）さん、石井（(？）さん、海保（茂道 13）さん、宇佐川（文恵 13・故人）さん、竹村（昇 13)さん、中村（友二 13)さん、中村（信?)さん、真鍋(?)さん、日野（博文 14)さん、狩野（一子 14)さん、曽根原（現水本靖子 14）さん、それに秋野(?)さん。12　　スキー隊は、杉野沢よりゲレンデを列をなして歩いてきました。今日は朝から霧が出ていました。３０㎝先は視界困難。気温もかなり低いようです。　午後から、小屋の片づけ、ストーブの高さを少し上げました。それから、山吹色の絨毯が今年から新しく　敷かれました。本当は沢山書きたくなってペンを走らせたのですが・・・。

杉野沢まで、スキー隊を迎えに下る。新雪が２０㎝くらい積もっていた。皆あまり転ばず一気に下った。ところがスキー隊は出発した後で、慌てて追いかけ、駐車場で追いつく。予想通り荷物を持たせてくれた。私は何も持たず、リフトで登る。みんなは歩いていく。ウシウシ。ところが、杉野沢リフトが混んでいて、２時間近く待たされ、凍死しそうになり、漸くリフトに乗り、みんなに追いついたのは第２リフトまで行ったとき。スキー隊はちょうど五八木で休んでいた所。総勢２６人。山小屋始まって以来の人数ではなかろうか。メシが少ない。私は飢え死にしそうである。７日までこれで我慢しなければならないのか。　今日嬉しかったこと。三年生が入ってきた。岡戸、秋野。たった一泊だけど、とにかくよかった。

／・カメはのろいし、なめくじものろい。しかし、飛行機は早いし、年が過ぎるのも早い。そう、その早い話が、山小屋に泊まることになったでガス。理由はいろいろあるけど、結局泊まるのでガス。この山小屋に２０人を超えて泊まると言うことは落成式以来のことだろうと思うけれど、なにしろ、その早い話が、大勢で泊まったのをこの目で見たいがために山小屋に来たのでヤンス。冬という季節は、山小屋にとってひとつの壁であると思います。我慢できるまで待っては居ないで、我慢しに来た人は今日で２６人。ご立派でごザンス。あと５日間を過ごそうナンゾ、今の俺には、どうしてどうして。それは全て、耐ナントカ　と言う文字でかたづけられるものではないでしょう。でもその、早い話が寒いよ。スキーをとるか、数奇な山小屋をとるか。

今日は美しい星空。明日は冷え込むでしょう。２６人が２階で寝て、床が落ちて来ないでしょうか。この小屋で冬を過ごしたことのある人は、そう簡単には、国大の建築科を信用できないのではないでしょうか。（この間　少し時間の経過がある）－－－　　ネエ、お願い、私にメシを喰わせて。

山川(12)

昭和46年１月３日（日）　26名

晴　－１４℃

午前中スキー練習の後、午後から杉野沢へ下る。友達に電話をかけた後五八木荘で岡戸を待つ。林間コースは非常に混み合っていて、ガリガリに凍っていた。大分遅れて岡戸、秋野到着。リフト乗り場まで送ってもらう。杉野沢リフトを降りると、もう、そこから上は止まっていた。仕方なくそこから歩くことにした。辺りは薄暗くなり始めていた。スキー２本はかなり重い。ずっとスキー場の真ん中を歩く。途中でスキーパトロールが大転倒。私のすぐそばである。彼はテレ隠しか、私に「これから何処まで行くのですか」と言う。「国大の山小屋まで。やはり転ぶこともあるんですね」と言ってしまって少しかわいそうだったなと思い、「こんなに暗くなるとギャップが見えないでしょう」と言ってあげた。そこからまたドンドン登る。早稲田の小屋の煙突から煙が上がっていた。空には三日月が出る。妙高の上の方には雲が上がっている。もうかなり暗い。自分が何故こんなことをしているか不思議だった。自分が生きているのかどうか疑問だった。つくづく彼等二人が羨ましかった。岡戸が約束の時間に間に合うように一人で先に来たとしても、彼は絶対にそんなことはしない。しかし、それによって彼が、より

低く評価されると言うことは決して無いだろう。小屋迄歩いて行こうとしたが、スキーのコースを少しはずれると膝までもぐってしまい、危険を承知で第２リフト終点まで行き、そこからスキーを履く。野尻湖の方で灯がとてもきれいだった。スキーを着け、村松のスキーを持ち、斜滑降で滑る。下の状態はまるでわからない。どの位のスピードかもわからない。赤布の旗を探しながら、バス通りに出て、小屋の入口まで行き、そこから木を縫って小屋前まで。通り慣れたコースだったので、見えなくとも転ばずに帰ることが出来た。

山川(12)

昭和46年１月４日（月）　25　名

晴後雪後曇

山小屋に入って３日目。スキーに慣れてまいりました。午前中、昨日と同じくスキー練習。午後自由練習。中村信子が昨日痛めた足、今日の昼間よくよく見たらかなりひどいので、杉野沢に下ろすことにする。早稲田からスノーボート借りてきて、ゲレンデまでワカンで運ぶ。それから先はスキーパトロールに任せました。人数が大分少なくなった、何となく淋しくなった。 買い出しの帰りに、グリーンロッジの診療所で高橋さんに会い、信子をどうするか話す。診療所の担架で五八木荘まで運ぶことにする。診療所では骨折の可能性が強いという。副木の当て方など、手当がうまいと褒められたが、我々は大きな失敗をしている。それは、本人の言葉を信用してしまったことである。一番始めにまず、靴下も脱がせてみて、骨折か捻挫かを判断しなければならなかったのに、捻挫と思いこみ、捻挫の処置しかしていなかった。それは今後の診察の結果がどうでようとも反省を要する。ところで、ところで、いざ担架で運ぶとなるとなんと重い事よ。日赤の講習会ではたしか、４－６人で運んだはずであるが、今回は私と高橋さんの二人切り。２０ｍも行くともう手がしびれてしまい、下に下ろして一休み。高木に長靴を持ってきて貰ったのが非常に助かった。１０回くらい途中で休み、五八木荘に収容し、岡戸、秋野に後を頼む。そこから山小屋まで帰るのだが、リフトなど動いている訳がない。悲壮な決意で杉野沢から歩き始める。途中、買い出しの時岡戸から貰ったアンパンを半分ずつ食べる。山荘笹ヶ峰に寄り、早稲田のスノーボートのことを頼み、また登る。月明かりで懐電無しでたやすく歩けた。第２リフトの売店まで行き、その少し上でスキーを着ける。時々稲光がする。乙見山方面から、雲が出てきている。昨夜に引き続き、またここから滑ろうとは思ってもみなかった。山小屋に着いて、ガツガツと飯を食べ、まず一安心する。

記　山川

昭和46年１月５日（火）　25　名

朝早く、榊原氏、山ノ井と共に杉野沢へ下る。信子を五八木荘から送り出す。トランシーバーで２度交信。よく通じた。雪がひどく、私が上に戻ったときにはスキー訓練は中止になって、皆小屋に帰っていた。尚、五八木荘で、ひげを剃り、顔を洗い、歯まで磨く。雪も欺く白い肌。水も滴るいい男。さすが…なんだワー。疲労困憊。先に寝る。

昭和46年１月６日（水）晴

今日で１６日目。いよいよ明日は山小屋とお別れ。よく居たものだ。純氏、久保田、真鍋、竹村、赤松、下山。岡戸、秋野も今日帰る。今日、山小屋は１０人だけ。１０人も居て、　だけ　と言えるほど、今度は沢山入った。昨日に引き続き疲労困憊。もうだめ、もうだめ。眠くてしょうがない。１日中自由練習で、よく滑った。あっという間にリフト券３枚が消えた。かなり満足できる成果を得られた。

山川

昭和46年１月７日（木）曇

昨夜の冷え込みが、途中で和らいだと思ったら、今日は曇。いよいよ今日で山小屋とお別れである。長いようだが、１７日間もあっと終わるという感じがする。２１日に部屋を散らかしっぱなしで出てきたのが気になる。今、６時ちょっと過ぎ、後少しで日が昇る。我々はこれから朝飯。今日はこれから小屋の整理をして全員下山。今日帰る人。４年　高橋、桜井　　３年　山川、　　２年　中村（友）、宇佐川、海保、石井、　　１年　日野、狩野、曽根原

山川

昭和46年１月８日（金）小雪ちらちら

昨日、例の夜行で上野を発ち、７時のバスで岡田さんのところに行ったら、高橋さん、桜井さん、丹羽さん、稗田さんがいた。稗田さんは友達と志賀高原へ行くと、僕らと入れ違いに出ていった。リフトが動くまで岡田さん宅で休む。朝食を頂く。丹羽さんは昨日来たそうで、今日僕らと一緒に小屋にはいることになる。高橋さんが１０日に来るそうだ。今日は午後より食糧買い出しに杉野沢へ下る。今シーズンの初滑り。何回転んだことか。河野のスキーも持っていたので、バテバテで小屋に帰り着いた。夕方に丹羽さんが河野にスキーの手ほどきをする。　入山（小屋入り）　榎本（記）、

河野、丹羽
（追）　小屋を直してから初めて来た。１階も広くなり、２階も全部畳が入ってやっと一人前の山小屋になった感じ（但し、入口のすぐ上の２階の部分の板張りがしていない。予定に無かったのかな？）。この日、買い出しの時、改築費の残りを支払いに和信に行った。社長さんと厚生省の許可のことについてちょっと話す。社長さんの話によると、書類はちゃんと役所に出してあるそうで、どこかで書類が止まっているのではないか。今ここで、許可のことをうるさく言って、やぶ蛇になってはまずい。今、別に問題が起きているわけではないのだから、今のところは、このままにしておいた方がよいのではないかと言うことであった。そして、何か問題が起きたときは、責任を持って、社長さんが対処してくれるとのことであった。一応、役人の人に、どうなっているか聞いて置いてくれているそうだ。なかなかわからないらしい。

昭和 46 年１月９日（土）曇ときどき雪

今日１日中スキー練習。午前中は丹羽さんと二人で河野にスキーのコーチをする。教えるのは難しい（自分もちゃんと出来るわけではないので！）。午後はまた買い出しに下へ降りた。今晩は畳を下に降ろして　囲み、絨毯とフライシートを垂らして小部屋を作った。冬はやはり、小さく仕切れる部屋が欲しい。（特に少人数のときは）。厚いカーテンか何かで囲むようにしたらどうかと思う。

榎本吉夫(12)

昭和 46 年１月 10 日（日）快晴（１日中雲一つなし）

朝、トランシーバーで石橋さんと交信した。９時頃上ってくるということであった。今朝は寒かった。小部屋を作ったがそれでも寒かった。小屋内でマイナス１４度、外で１６度あった。今日も一日中スキー練習、リフト券があっという間に無くなってしまう。金がもつかな！（金がなくなったら帰ることにしている）。今日も飯を食ってからは、する事が無く、ストーブをすぐ消して小部屋にストーブを持ち込んで、昨日に続き今日は４人でセブンブリッジをする。以下はその結果。（省略）

榎本吉夫(12)

昭和 46 年１月 11 日（月）快晴（１日中雲一つなし）

２日続きの快晴であった。そのため朝方、ゲレンデはガリガリに凍っていて、スピードが出る。この２日間で、大分雪焼けした、顔がヒリヒリする。今日もバシバシ滑り、リフト券が無くなり、金もなくなる。夜は例の如く、セブンブリッジ。（結果　省略）

榎本吉夫(12)

昭和 46 年１月 12 日（火）朝晴、

午前中より雲が出て、昼前にはガスる。午後は小雪がちらつく。天気が悪くなったので、丹羽さんと石橋さんは昼から帰ることになった。午後はガスっていて、視界が無いので、スキーはやめ、小屋の横の、屋根の雪が落ちて溜まったところに、雪穴（雪洞まではいかない）を掘る（１：３０分かかった）。衣服はビショビショとなる。今夜、ここで寝ることにする。屋根が落ちて埋まりはしないか、酸素不足で窒息しないか心配。

榎本吉夫(12)

昭和 46 年１月 13 日（水）朝＝晴、午後より雪、風強し

無事生きていてよかった！シュラフは蒸れてびしょびしょ！シュラフカバーをしていたらもっと濡れていただろう。どうすればよいか。新聞でも挟むしか手が無さそう。通気性のあるシュラフカバーが欲しい。そろそろスキーにも飽きてきたし、金もなくなってきたので、明日の午後の鈍行で帰ることにする。今日で６泊目である。（山川氏は１７日間も、ほんとにご苦労さんでしたね。）夜になって強い風が吹くと、小屋の中に雪？（氷かも）舞う感じ、まだどこかにスキマがあるらしい。

榎本吉夫(12)

昭和 46 年１月 14 日（木）雪

昨晩よりの雪が３５㎝ぐらい積もっている。まだ降り続いている。思った通り小屋の中に雪が積もっていた。２階の畳にも積もっていた。畳を上げておく。天井を張らねばならない。小屋の掃除をして下山する。

榎本吉夫(12)

昭和 46 年１月 23 日（土）雪

ゲレンデが閑散としているのではないかとやって来た。ついでに小屋に顔を出す。１年前に較べて屋根からストーブの周りに雪が落ちてないから、小屋の中はきれい。昼食をご馳走になりました。

昭和 46 年３月 11 日（木）

またまたやって参りました。これで 13 回目。今回は女性２人と一緒。御名前は山ノ井とし子さんと狩野一子（14 期）さんであります。それに私、一風変わった member でありますが、試験が終わって飛び出してきたのが、この３人なのであります。数日後にまた数人入る予定でありますが、試験が終わった時期にこれだけとは少々淋しい感じがあります。正月に沢山利用したということはあるのでしょうが、ここは何回来ても良いところです。私なぞ、山に登れる時期には登らず、スキーが出来る時期にはスキーをせず、それでいて、13 回も来たのです。１回１回が楽しい思い出にもなっております。　夜行列車は意外に混んでいて、丁度いっぱいに座れる程度、それに暖房が効きすぎ、かといってデッキでは寒すぎ、殆ど眠れませんでした。岡戸さんの家で、朝食をご馳走になりました。相変わらず 40 人ほどのお客が居て、これが３団体も入るそうです。季節番頭の私としては、手伝った方がいいのかもしれませんが、今回はここでのんびりすることにします。それから、リツ子さんに再会できたことは、大変嬉しかったです。11 時頃ここに着いたのですが、驚いたことに、雪ですっぽり埋まっています。少々オーバーな表現をしましたが、普通に歩いて小屋のてっぺんに登れるほどです。昨日までの１週間降りっぱなしだったそうで、無理もありませんが、一番最初に来た者にとっては大変なことです。便所の窓から中へ入り、スコップを取り出し、玄関の前の雪をどけました。ほっと一息ついて中にはいると、またまたびっくり、以前ベランダだったところに雪がどっさり、窓のガラスが割れてしまっているのです。こりゃ大変と、またまた雪かき。粉々になったガラスが混じっているので作業は慎重。やっと雪をどけ、割れた窓にグランドシートを張り、一応の手当は完了。その間、女の子二人は、これまた雪に埋もれた薪を取り出すために、悪戦苦闘。おかげでスキーはお預け。　夜になりました。おいしいカレーを食べ、１日も終わりに近づきましたが、しっけた薪のため、小屋の中は煙でいっぱい、さかんに涙を流しましたが、その涙もすぐ、煤で汚れてしまうほどでした。

（3/12 夕山下記）

昭和 46 年３月 12 日（金）

午前晴、午後曇後小雪

　寒くて寒くて。物みな凍る朝になりました。８時ちょっと前に起き出し、いざゲレンデへと言うことになりましたが、私は中止、ワカンを履き付近へ写真を撮りに。しかしそれが大事（おおごと）になりました。なるべく高い方へと進んでいたのですが、それが私の登高本能を呼び覚まし、ついに三田原と赤倉の鞍部まで行ってしまったのです。あとちょっとで三田原の頂上ですが、いかんせん、お腹が空き、一歩も登れなくなってしまいました。やむなく断念、下山を始めましたが、気温が上がったためか、雪が団子になってしまい、転げるように降りてきました。小屋に戻ると二人も帰ってきており、昼食の用意をしていてくれました。その後二人は再びゲレンデへ向かいましたが、私はだらしなくゴロリ。勉学の意欲に燃え、相当本を持ってきたのですが、読む気、全く無し。仕方なく薪を冷蔵庫から取り出し、薪割り。そうこうしているうちに二人が帰ってきまして、本日の私の仕事はおしまい。食事の支度は彼女たちが、全部してくれています。本当に幸せ！私一人になったらどうしようかと、今から不安です。

（山下記）

このノートを私個人の日記として使用さしていただくことをお許し下さい。私は現在酔っぱらっています。時間は 10 時半をちょっと回ったところ。女の子２人は既にシュラフに入っています。ストーブの薪もそろそろ底を尽き、ローソクももうじきその命を尽きようとしています。外は満月が輝いており、雲一つない晴天です。明日は何をしようか等と考えているところです。ここにいると出来ることは限られてしまいます。スキーをする事、今日みたいに山に登ること、その他、一日中寝ていること、本を読むこと、造林小屋の雪下ろしをする事、せいぜいそのくらいです。しかし私は、明日の一日を有意義に過ごさなければなりません。何故かと言えば、横浜にいるとき、１日１日を全く無意味に過ごしてきており、それから抜け出るためにもここに来たからなのです。しかし、スキーも登山も読書も、私の現在にとって、意味あるものとも思いません。こんなに神経質に考えることもないと思うかも知れませんが、漠然と過ごしている私にとって、山小屋というのは、こんな事を考えさせる場所なのかもしれません。私が現在したいことは寝たいだけです。しかし何か、この紙に書いていなければいけないような気がするのです。普段でも、大学で勉強しているよりは、ワンゲルで山に登っていた方がよっぽど楽しいのです。しかし私は毎日、山に登っているわけではありません。何かに規制されているのです。それは何だか解りません。将来のことを考える故に、かもしれません。私は現在何かを求めています。それは確かに判っております。しかし、その対象がさっぱり分からないのです。それはあるいは、現在のような状態を、であるかもしれません。女性を求めているのかもしれません。それより、安定した社会的地位を望んでいるのかもしれません。もっと考えれば、あるいは死んでしまいたいのかもしれません。私はそれを探すべく毎日を生きているのです。実際はそう思ってはいるのですが、現実は

余りにも平凡な、家と部室のピストンを繰り返しているのです。私も今度の４月で４月、早々と留年を決意してしまった身ですので、就職の心配はありませんが、男子一生の事を考えるとあせります。私は今、ある女性に恋をしております。それが成就するかどうかは分かりません。多分その女性を忘れなければならない日が来ると思います。しかし現在はそんなことを考えたくはありません。少なくとも今の私にとっては、そのようなことを考えること自体、自分を偽っているからです。キザかもしれませんが、私は私の一生をこの様にして生きたいのです。裏切られてもいい、何の成果も無くても良い、その時その時の自分の心を偽らずに一生を送りたいのです。最後の薪が燃え尽きようとしております。万年筆のインクも無くなりそうです。しかし私は、何かを書いていたいのです。最初に私の日記と書きました。しかし私は、誰かに読んで貰いたいのです。他人が読んでも面白いところは何もない戯言かもしれません。しかし読んで貰いたいのです。この小屋を使った全員に、酔っぱらいの戯言を。最後の薪がまだ燃えています。私も何かを書き続けなければいけないような気がします。今、私の耳に聞こえる音は、最後の薪が燃え尽きる音だけです。外はますます冷えてきています。おやすみなさい。

（山下記）

昭和 46 年３月 13 日（土）晴

強烈な寒さで３日目の朝が明けました。朝食は美味なお雑煮、私は４つ食べました。昨日のアルバイトがきつかったのか、身体がだるく三田原の登頂は止めにしました。（このあたり、審査会を全く無視している態度ですが、お許し下さい）。９時過ぎ、小口君とその友達３人がやって参りました。まだ入山して３日ですが、もう人恋しくなっていたようです。その後桜井さん、少し遅れて完全装備の高橋さんが到着、小屋もいっぺんに９人になりました。

本日やった仕事

●小屋の雪下ろし…梯子を取り出し雪下ろしをやったわけですが、今日は気温が昇ったので、わざわざ落とさなくても落ちたようです。

●井戸の発掘・・・着いたばかりの小口君には気の毒だったですが、なにしろ、雪を溶かして水を作っていたのでは大変ですので、早速やってもらいました。しかし掘っても掘っても、目指す井戸は出てこず、約 10 立法㍍の雪を３時間ぐらいかけてどかしたのですが、結局見つからず、本日の作業を中止、収穫は積雪が３ｍだと分かったことです。こんなに積もったのは山小屋が出来て初めてだと思いますが、それでも小屋は未だに壊れませんので、雪のため潰れる等と言うことは無いと思います。

●この小屋に来て、仕事というのは全て、発掘作業から始まります。水（井戸）、薪、石油、生活に必要な物は全て、３ｍの雪をどかさなければ得ることが出来ません。考古学者等というのも、こんな事をしているのかなと思ったりします。

●私のこと・・・本日もスキーをやりませんでした。これから 19 日まで、１回ぐらい滑る気が起きるのかなと心配したりします。読書をしませんでした、読むべき本を４冊持ってきたのですが、どうしても１冊位は読み終わりたいと思っています。ここで何もしなければ、返って横浜へ帰ってからやる気が起こるのではないかという都合のいい考えをしております。只今９時 20 分。起きているのは女の子二人と私。

（山下記）

９時過ぎ、山小屋にやってまいりました。なんというか、３人も一緒に。この３人、みんな高校の同級生。
＜御紹介＞　高垣直樹　見た目はごついが、気は優しい。サッカーで鍛えた体力は抜群。スキーはうまい。現在慶応大学工学部１年。

緑川修　ロマンチスト。恋人はじっくりと、自分の夢にあった人を探すという。スキーは初めてという。現在、東京大学文＊　いくつか忘れた。１年、サッカー部。

石川堅太郎　高２の時より＜堅ぶつ＞と呼ばれる。少し口数の多い面もある。スキーはうまい。現在は故郷の近くの山形大学工学部１年、マンドリンクラブ。

小口

晴　杉野沢で岡田さんの所に挨拶して、宮前のいつも、スキーを脱ぐ所で、スキーを着け登り出す。付近の親父の、ビックリした顔。運動不足のせいか、初めのワンピッチのかったるいこと。３時間かかって山小屋に着く。途中休むこと７，８回（？）。山小屋で小口の友達が寝ていた。小口が紅茶を出してくれた。よく訓練されている事よ。午後はスキーをやる。

高橋

昭和 46 年３月 14 日（日）雪後晴

昨夜来の雪でゲレンデは新雪となっていた。雪煙を上げ気持ちよく滑る。午後、山下と笹ヶ峰に出かけることにする。彼は普通のスキー。それでもよく頑張った。入り口付近で引き返す。

高橋

昭和 46 年３月 15 日（月）晴

三田原へ登る。コースは 69 年６月偵察していたコース。地元の人に聞いていて、渋民沢から４つ目の沢

の所、三本木付近から入った。池の峯の稜線を登るともっと良い。途中、この斜面で一番深い沢を渉る。それからはまっすぐ直登。山小屋から稜線まで４時間ちょっと。稜線上は雪ピに注意、かなり張り出している。途中、２回ばかり、ドスと落ちた。下は向こう側の斜面の草。

高橋

昭和 46 年３月 16 日（火）晴後薄曇

小口とその友達、桜井が下山。私は乙見山峠　目指しがんばった。真川の向こうの平坦の所まで行った。トレースがしっかりと　ついていた。

現在、山下が一人歌を歌っている。ストーブは細々と燃えている。山小屋は閑散としている。正月には、この小屋に何十人と居た。みんな、スキーというレジャー、あるいは、山登りという遊びを楽しむために。今ここに居るのは、現在の俺からの逃避。全く惨めに自由な奴。ただ、山を歩き回り、滑る。何の目的も無く。時間だけが過ぎ、何も得ることが無く、又、俺へ帰っていく。今の俺は　何なんだろう。食い、寝て、動き、そして泊まる。この、何の目的も無いものが、俺の求めているもので、横浜の俺は、このための準備の人形かもしれない。今の俺には、何の結論も出せない。ずっと昔に、判断中止にしてしまった事なのか。

（タカハシ）

山下がロウソク再生産に成功。所要時間２時間。　（作り方）

１．適当な容器に、残った蝋を入れ、溶かす。

２.便所にあるロールペーパーの芯の、一方を塞ぎ、溶けロウを流し込む。

３．割り箸を中心に立て、固まるのを待つ。

４．箸を抜き、その穴にロウを溶かし込んだ麻紐を入れる。

５．回りの、ロールの芯をはがす。　　完成

昭和 46 年３月 17 日（水）

小雪（時々薄日が差す）

雪が１０㎝ほど積もった。昨日まで一緒に生活していた者達の跡を消した。昨日までの重労働でバテ気味だったのと、シュラフがあんまり暖かかったので（？）、風邪をひいてしまった。山下と、朝８時半頃起きだし飯を作る。それからしばらくしてホットケーキを作った。１２時頃ゲレンデに出た。一人で、第２リフトで滑降。つまらなくなり、杉野沢へ下った。リフトの前のグリーンロッジが閑散として、ドアが開いていた。コーヒー、おしるこ、ｅｔｃを食べる気がせず、リフトでゲレンデへ戻った。第２リフト直下の斜面を滑ってみる。新雪とあらふ　された雪面のチャンポンでなかなかおもしろい。８回くらい滑った。その斜面を、パトロールが俺よりもしっかりしたウェーデルンで降りてきた。俺もうまくなってやる・と意欲が湧いてきた。スキーもおもしろいものだ。　買い出しをしようと小屋へ戻った。誰もいない。山下はどうしたか。かったるいので、ストーブに火をつけ、ボヤッとする。俺ももうＯＢなのだな。この４年間、刹那的な欲望や情熱しか持てなかった。山下が帰ってきた。買い出しは　とうとう出来なかった。今日はあり合わせのもので晩飯を作ることにする。　今回の山小屋行は大変だった。山小屋始まって以来の積雪量のため、あらゆるモノが雪の下、中でも驚いたのはエントツ。昨年に煙突を建て替えた事が功を奏し、煙突は立派にたっていたが、約半分が雪の下で、中に雪がいっぱい入っていた。このため最初の１日は、ストーブが煙くてしょうがなかった。次に井戸掘り、積雪３ｍもあるので、掘り出すのだけでも大変なのに、場所が分からない。試みること７，８回、ついに井戸はでてこなかった。

高橋秀雄(11)

昭和 46 年３月 18 日（木）ど快晴、後薄曇

遠く越後三山を始め、横手・笠など志賀の山並みが見える。スキー場は、いたるところ滑れ、大変ご機嫌である。　今回の山小屋行は、写真をよく撮る。９本ばかし。その中に、山小屋の良い写真があるように。今日はスキーの写真を撮る。初めは俺がモデルになり、山下が撮る。第２リフトの直下。それからは、モデルを探しながら、俺が撮る。午前中は、良く晴れていたので、野尻湖、志賀の山などをバックに滑降しているスキーヤーを撮った。１カ所にじっとしてスキーヤーを待っているので、なかなか旨い奴が来ず、苦労する。午後は１３５㎜レンズをつけ、首からぶら下げ、右手には手袋を着けず、滑りながらモデルを追う。何回も同じ人を撮った。スキーの良い写真を撮るのは難しい。明日は下界に帰る。今度来るときは是非、火打山へ登りたいモノだ。

高橋秀雄(11)

昭和 46 年４月８日（木）

本当に今日は８日なのだろうか。春休みに入っていることと、腕時計の日付が壊れていることとが重なって、日付の感覚が消え失せてしまっている。さて、僕が来るときはいつも大勢。たまには一人でと思ってやってきました。ところが小屋に来ても誰も居ない。小屋迄来れば誰か居ると思ったのに。（特に榊原さん）　以下、今日の記録

5:00（下宿）起床　6:50　妙高１号（急行！）に乗

る。ぎりぎり。でも座れた。いつも 2259 だから変えてみた。　10:17　長野駅下車。善光寺へ行って来る。ここで甘酒を飲み、岡田さんの土産にまんじゅうを買う。　12:10　妙高２号（これも急行！）　2:20　やっとバスが妙高駅出発、この間パチンコをしたが１０分でダメになったので、待合室で読書。　3:00　岡田さんの家へ行く。呼べど答えず。仕方がないので置き手紙と土産を置いてリフトに向かう。　3:15　リフト乗り場。なんとなく、妙高の駅のあたりから感じていたことが現実となる。リフトが動いていない。雪の溶け方の早いのに驚く。再び歩き始める。バス道は除雪されている。丁度、国大の山小屋の近くに除雪車が居た。ちょっと疲れているようで、ふうふう言いながらも、途中２度の休みで登って来れた。　4:50　山小屋到着。誰も居ないとは思っていなかった。夜は腹の調子が悪いので（ここ数日）、田舎から送ってきて貰った「氷餅」という奴を、お粥のようにして食べた。無性にのどが渇き、腹が痙攣する。苦しい　～～!!　6:00 に夕飯を食い終わった。果てーー明日何をやろうか？オレはスキーをやりに来たんじゃなかったのか。ところがリフトは動いてない。ケイレンする腹を引きづりながら、リフト無しのスキーはちとつらい。しかも、大分雪も溶けて、生活に苦労することはない。結論ーー何らやること無し。いやはや困った。本は３冊持ってきた。読もうかな、いいやいいや明日のことは明日考えよう。しかし、ロウソクと対峙して唯一人、歌が出ます、詩が出ます。（一人だから、どんな下手でも文句言われません）　自分を見つめる良い機会になるかもしれません。　（小口記）（追）今、山小屋日記 No.４を読みました。時間は９時。外は相当風が強い。一人ですが寂しいという気持ちはありません。下宿住まい慣れてしまったのでしょうか。（でも、下宿して２，３日は何となく人生のはかなさを感じた）。今日はココアでも飲んで、もう寝ようと思っています。毛布もたくさんあります。良い夢が見られますように。お休みなさい。

小口

昭和 46 年４月９日（金）

⑴午後　1:15　に書く。　今日の起床　7:30、よく寝たので大分調子がよい。３０分程外を散歩。それから朝飯にラーメンを食う。笹ヶ峰ぐらいまで行こうかなと思っているうちにガスが出てき、天気も曇ってきたので止めにする。しかし、そうと決めるとやることがない。大体リフトはどうしたんだ。畜生！やり場のない怒り。でも、自分が悪いという結論に達して、しょぼーん。食糧は３日分持ってきたので、ここで帰るわけには行かない。無い金を工面してやっと来たんだ。ここで帰っちゃ男が廃る！！　11:00　頃から雨が降り始めました。

⑵午後　6:30　記。　井戸が見つかりました。あの目印の木は相当曲がっているんですね。只今積雪 1m50 ㎝、どんどん溶けてます。今日は雨が降ったので、一段と溶けたようです。やることがない、無いと言いながらも、時間は過ぎていくものですね。今日はいろんな事を考えました。故郷のこと、ワンゲルのこと、片思いの彼女のこと、新学期のこと…・やっぱり山小屋って良いところです。

我等の学年で、この１年間にワンゲルを去った者（僕の知っている限りで）

露木…新人歓迎コンパで初めて会う。負けん気なところが印象的、スキー部に５月頃移ってしまった。

石渡・・・新人歓迎ワンで一緒。カワイイという感じの人。

川端・・・せっかく友達に、と言うときに。何か死というものの重さみたいなものを痛い程感じる。

石川・・・彼は、直接は川端の事故というもの、そしてそれによって、今迄の、個人の意志を圧殺していると感じていたワンゲルに怒りを持ち、去った。余りにも一本気に過ぎたのではないだろうか。

伊藤・・・彼も、あの事故で辞めた者の一人。彼には少し坊ちゃんじみた所があるから、家庭の圧力でもあったのではなかろうか。

浜野・・・彼は、はっきり言うと弱い、あまりに弱すぎる。あまりに内気、いや内気とは違う様な気がする。そう、今彼は悩んでいる。頭の中だけで生活している。（これは僕の勝手な判断かも知れない。反論のない人物を捕まえて、あまり勝手な事を言うのは止める）。

田代・・・本当に純情な人、でも、あの「されど我らが日々」に出てくる節子の、あの強い一面（勇気）みたいなものを持っている。

池田・・・彼の田舎じみた良さに、ちょっと惚れていた。

まだ沢山居るけど、もう書くのがイヤになった（何となく寂しいもの）。やっぱり我々はワンゲルを通しての仲間、ということを感じる。ワンゲルを去ってしまえば、殆ど交際といったものは無くなってしまう。でもやっぱり、それは諦めなければならないことだろう。彼等は彼等なりの道を歩み、僕は僕なりの道を歩いているのだから、彼等のことは自分の心にしまって、今居る友に、お互いに心を割って話し合えるように努めよう。

⑶8:30　記。　明日は下山することにした。食糧はドサッと残していく。なお、明日の予定は（あまりに個人的なことで申し訳ない）

５：００起床
６：３０下り始める、岡田さんに挨拶
８：４７妙高発
９：５５直江津着
１０：２３同発
１１：３０糸魚川着
１３：１０糸魚川発

松本着
１６：２６松本発
１７：２３辰野着
何とバカな、とお笑いなさるな。何となく知らない町に行ってみたいだけなのですから。なお、辰野は僕の故郷（おふくろの、と言った方が正確）。　もう９時になりました。明日はもうこのノートに書くことはないでしょう。山小屋さん、また来るからね。おやすみなさい。

（小口）

昭和46年５月３日（月）

１年生６人（田中、三島、中島、筒井、木下、三木）と、上級生３人（日野先生に小沢先生に宇佐川先生）が、５月１日の2259を１日間づらして、２日の2259でやって来て、山小屋へ３日の朝９時頃着いた。と、小屋の中には、野田大先輩が、いじらしく台所仕事をしているところでした。昼飯を食ってから、ゲレンデ（第３ゲレンデの先）まで散歩に行った。帰ってからは、ゴミを掃いて穴の中に入れたり、水くみなどの仕事を、積極的（？）にやりました。その後、井上氏（肇３期）とその同僚の方が、顔を真っ黒に焼いて帰館、カナメあたりで前日に、ヒヤッとしたことがあったとか聞いた。

筒井

昭和46年５月４日（火）雨

今は、山小屋で、ボンボン燃えるストーブの周りに居る。今朝、雨の中を高谷池から下山してきたとは信じられない。ここにいる人達はもう、この山小屋の建設時を知らない。この山小屋建設に力を入れた人は、もうこの部には居ない。小屋が建ったのを見ずして、卒業していった人もいる。山小屋を、実際に建ててくれた和信建設も今はもう隅の方へ追いやられてしまっている。そして、そこと交渉してきた人達も、山小屋の主力から離れていってしまった。落成式の時、机や椅子を貸してくれた小学校の先生達、田舎の小学校の先生らしさ、何というか、タヌキ親父みたいな先生、あの人達も今は忘れさせられている。それら全てが、今は、昔の人達、の胸の中に生きているだけであり、この山小屋も、全てを忘れていったかのように立っている。この床、この柱、この棚、この流し、このスノコ、この机、全てが、これを造った人達を忘れ、古び、汚く、ごたごたと、今居る。そして新しい１年生を迎え、また新たな活動の場となっていくのである。以前の人々が願ったことは、みんなが楽しく、有意義に過ごしていくことである。彼等が出来なかったことを。紛争が終わった時、このクラブに情熱を失った人たち、俺も、かくいう、その中の一人である。自分がこのクラブに居る必然性、このクラブに夢見たこと、それら全てが無くなってしまった。この１年間、俺達の代は、部から一歩離れて行動してきた。彼はもう、下級生の面倒を見ず、同じ代の仲間と過ごした。彼はクラブを、山へ行くサービス機関と考えた。彼は全てから離れてしまった。彼は、自分の役目のみを果たし、他は何もしなかった。もうあれ以来、俺達はこのクラブに自分自身を賭けたり、目的を持たず、ただまっしぐらに進むことをしなくなった。全てが打算的になり、全てに情熱を失った。あの１年の頃、重い荷物をもくもくと背負った彼。２年の時、合宿成功のために、自分の能力以上の力を出した彼。３年の時、何も分からず、ワンゲルとは、サークルとはなど、口走った彼。みんなみんな去って行ってしまった。そして、自分の全てを出してクラブに臨んだ１年、２年の頃を懐かしむのである。自分の若さの終わりを悔やむ。

彼はただ黙々とクラブ生活を過ごした。決して表面には出ず。他に何かをするでなし、ワンゲルをどうこうする事もしなかった。同じ代の我々と面白く過ごしてきた。口にすることは「しみじみとテントで語り合いたい」「本当の人間を知りたい」とか。それを楽しみに、山へ行ったのかも知れない。後、この山小屋で調理台を造ったとき、彼と喧嘩をしてしまった。何も言わず怒って、外に飛び出していった彼。外で下を向いて、佇んでいた彼。彼が、この山小屋、このクラブで主役だったときもあった。今は山小屋では、隅の方で、ＯＢたちと飯を食った。そして雨の中を帰っていった。

彼とは１年の時、負けたくなかった。荷物も、競い合って背負った。メシの支度、テントの撤収、なども、出来るだけ効率よく動くことを争った。夏合宿でも、どちらのコースが苦しかったか語り合った。彼と、本当にうち明けた話はしなかった。俺は背伸びしていたのか。彼も今は遠くに去ってしまった。
彼は俺の相棒だった。同じ山に行ったのも一番多い。バラバラになったのも、下級生の世話のことも、みんな分け合った。彼を信頼して、２年として合宿の中核を成した。歩荷のとき、「俺、もうダメだよ」と言った彼。合宿の時、１年が動かずイライラした彼。３年の時、全てに真剣に当たった彼。「こんなに忙しいことはなかった。過去２０年、眠っていたのかも知れない」と言った。彼も紛争の時、クラブに対する情熱を失った。今は大学院に居る彼。

彼は余りにも純情で、一途だった。彼の真面目さの前には誰も、頭を垂れずにはいられなかった。無理なワンダリングを必死になって追求していった。下級生とけんかしながら。彼も今はクラブにあまり居ない。彼は、俺のライバルとして存在した。クラブに対しても…、彼もこのワンゲルに自分の青春の全てを賭けたかったのだろう。紛争が終わったとき、新しいリーダー層のミーティングに、「彼等もやりにくいだろうか

ら、行くのはやめよう」と言った。「俺達の代は終わった」と叫んだ彼。彼もそれからクラブに顔を出さなくなってしまった。

ワンゲルは俺達の夢を食ってしまった。そして次の代も、ワンゲルで本当の苦労をし、人間というものを知っただろう。人間は、自分の情熱を傾けているとき、居られるときは良い、それが幸せなのかもしれない。しかし、一度全てのこと、人間関係、自分の目標を見失い失望したとき、その人が何をなすかが大事であろう。新たな目標を立てるのも良い。俺はしかし、打算的だった。いやらしく、汚い。落成式の時、上級生に失望し、ワンゲルに嫌気がさしたとき、辞めたくなった時、俺をこのクラブに繋ぎ止めたのは、山小屋を使えなくなる、友達と離れる、などの事だった。紛争が終わったとき、下級生を引っ張っていけなくなった時、俺達の代は、全て、このクラブを去ってしまった。　俺も今は、打算的にここに居る。火打の山から滑りたかったから、５月の山の写真を撮りたかったから、等々。俺達はもう、ここにいる人たちに何も言えない。ただ、俺達が、俺達の前の人々が、あれやこれや思ったり、笑ったり、怒ったりしながら、この山小屋を造っていった事を忘れないで欲しい。山小屋はそういう彼等の思い出の場所なのだから。

昭和 46 年５月５日（水）

俺ももう、ワンゲルの最最上級生になってしまった。昔の思い出などを書いてみたい。

ワンゲルに入ったのは、清水が丘へ登校する途中、雨で傘をさしかけてくれた彼が、「ワンゲルって良いじゃないか」などと言ったからであろう。そして、山などへその時行きたかったから、歓迎Wの上野駅で入部ということになった。本当は、ただその時、どこかへ行きたかっただけである。

新人合宿で、坊ちゃん坊ちゃんしていた彼と一緒であった。シュラフで寝る練習を積んできた彼。何も分からず、初めてのでっかいザックを背負わされ、ヨタヨタと、しごかれた。山の生活、ワンゲルなんて何も分からなかった。ワンゲルは上の方でユサユサ揺れ動いていた。　いつの間にかワンゲルの優等生になっていた俺、夏合宿では２週間、お花畑があり、雪渓の涼しい香りがする山で楽しく過ごした。８月下旬には、以前と違った山へ赴いた。技術的なこと、やり遂げたことが面白かった。それからは、少し、そういう山へ行った。その中で神経が太くなり、雨が漏るテント、水の上にシュラフを浮かべ寝ることや、食事、水、その他に強くなっていった。

この続きはまた今度。今日は５月５日子供の日である。みんな元気に、健やかに育ってください。

昭和 46 年７月 15 日（木）

まだこのノートが残っているので、ここに書くことにした。ワンゲルは質素でなければいけない。Ｎｏ５からの続き。　今、雨が降ってきた。黒姫へ行った奴等は、きっとずぶ濡れになって帰ってくるだろう。ストーブはつく。今テストをしてみた。食ったままにしていったのも片づけた。甘酸っぱいレモンの匂い。焼き飯の匂い、等々無くなって、便所の匂いが鼻を突きだした。脱臭剤が要るな。これからお茶を沸かし、水を汲まなければ。　何時間か経った。晴れてしまった。時計がないので何時だか分からない。ともかくも空には縞雲、高層雲、その他の雲が居る。妙高も、バックに高層雲を従えて立っていた。鳥は歌い、虫は叫ぶ。俺の腹の虫もグー。あいつらみんな持っていってしまった。何時間か前にラーメンを食った。しかし、腹が減った。この頃は良く食うようになった。

昭和 46 年８月５日（木）

（新しい山小屋ノートが無いので、ここに書きます。）今日は夏合宿最後の夜、お酒を飲み、歌い、しゃべり。私達３人を残し皆はシュラフの中。午前３時、みんな寝るのが早いような、今年は騒ぐ訳でもなく、皆が自然に立ち、それぞれ寝てしまった。　夏合宿が終わった。いや、それを書く前に、山小屋委員として皆に、御礼を言いたい。夏合宿の疲れたあと、山にも登らず、毎日、山小屋整備に汗を流してくれて、ありがとう。何十人もの人が山小屋のために働く、私はそれを見て、とても嬉しかった。山小屋、私達の心のふるさと。いつまでも大事に使ってください。今の私には、山小屋をとったサークルは無い。　台風の影響か風が強い。流れる雲の下で小屋の屋根に登り星を見た、遠くに志賀高原の灯りも見える。　再び、夏合宿が終わった。今はこれが、この後どのように発展するのか分からない。今はただ、ここで育った関係がこのまま終わって欲しくない。 ワンゲルは傷つけ合うところではない。情熱を失う所でもない。人間不信を育てるところでもない。　個人的なこと

24 kgを３日間ほど背負い、段々体がおかしくなるのを感じた。しかし尾瀬でのニッコウキスゲの群落、帝釈から田代での稜線での日光、那須、駒の方面の眺望、今までの霧が晴れ、青空と雲海の間に山々があった。田代の、あの広がり、今の私に、あの素晴らしさを説明する言葉はありません。空が空と感じられず、山が山とは感じられず、緑の中に一つの空間があった。木賊温泉でのテン場、緑の水の流れと、こまやかな落ち着いた雰囲気、そんなものに触れた時、一年生に（特に女性に）これらのものを見せてあげられる事の喜びを感じた。山の自然の素晴らしさ、それを知る人がまた増えたのです。それらを通して人は、生きているこ

とを、争うことの空しさを感じるのではないでしょうか。一年生に、二年になったとき下級生への思いやりとワンダリングー山行ーを、形作る行動を持って欲しい。

山ノ井

合宿中のこと、時々ふと思うのですが、山行中、この山行ー食事の支度、朝早く出る事、夜のテントで皆が楽しく過ごせること、そんな事柄がうまくいくように、その時のために、一瞬一瞬を、ベストを尽くす、それが一体何のためなのか、あるいは、それを通して何を作り出そうとしているのか、ーそう考えると何も無いんです。自分がこうしようとする意志が全く無い。自分が何処にも居ないんです。そして、こんな事をしていて良いのかなと考えてしまうんです。　自分のしようとする事は、外に在って、それが出来ずにいて、与えられた場所があり、そこでベストを尽くす、ベストを尽くすことと自分がすることとの間にズレがあって、時々ふと、おかしくなってしまうのです。
ここで我が５隊のスタンツの紹介、（スタンツを、何処でもやらなかったので、ここに紹介します）。題して　”ドジ哀歌”

１．包丁持たせりゃ指を切り
　ラジを着ければ空気漏れ
　朝から晩までドジ続き
　これぞ５隊の＊＊ちゃん
２．体操終わってキジを撃ち
　蓋をしたまま水を汲む
　（　仝　仝　繰り返し）
３．ドジ子相手にノイローゼ
　果ては夢にうなされて
　”ドジ子急げ”とわめき立て
　これぞ５隊の＊＊さん
４．家に帰れば日の出町
　山に入れば露天風呂
　朝から晩までムッツリで
　これぞ５隊の＊＊さん
５．キジを撃つのに人をどけ
　見えちゃイヤヨと喚き立て
　見えちゃイヤヨと戻れない
　これぞ５隊の＊＊さん
６．テン場料二重に払わされ
　果てはポールにキッスする
　（くりかえし）
７．赤いアタックカッコ良く
　来たは良いけどバタバタで
　ウェハース片手にミルク飲み
　これぞ５隊の居候
８．ヒゲをはやしてサングラス
　扇子片手にステテコ履いて
　山谷の手配師、ポン引きか
　これぞ５隊の元リーダー
９．人の顔にキジをかけ
　これがインスピレーションの答とは
　見かけに寄らず品がない
　これぞ５隊のサブリーダー
10.　朝から晩まで針仕事
　整理体操後ろ向き
　社会の窓が壊れてる
　これぞ５隊のドジリーダー

さっきから起きているのは私一人。風も大分おさまったような。チョコレートも無くなり、ローソクも後わずか。

またまたやって参りました。これで 13 回目。今回は女性２人と一緒。御名前は山ノ井とし子さんと狩野一子（14 期）さんであります。それに私、一風変わった member でありますが、試験が終わって飛び出してきたのが、この３人なのであります。数日後にまた数人入る予定でありますが、試験が終わった時期にこれだけとは少々淋しい感じがあります。正月に沢山利用したということはあるのでしょうが、ここは何回来ても良いところです。私なぞ、山に登れる時期には登らず、スキーが出来る時期にはスキーをせず、それでいて、13 回も来たのです。

１夏合宿。いろんな事があったでしょう。面白くないこと、不快なこと、何故こんな事をしているのか、大事な、時間とお金を使って、こんな事をしていて良いのか考えた人もいるでしょう。ワンゲル辞めようと思った人もいるでしょう。でも、それだけがワンゲルではないでしょう。今回の合宿は、いろいろの無理をしてやっとこぎ着けたもの。この経緯を通して、より楽しい、自分の望むようなワンダリングをつくって欲しい。決して辞めないでください。何かあったら自分だけで考えず、周りの人に話してみてください。　ローソクも消えてゆきます。山小屋さん、おやすみなさい。また来ます。

(山ノ井)

（ここで時間が経っています）　今までに会った人が次々に出てきます。そしてまた時間が経ちました。朝日が、固くしまった雪に当たって、キラキラ輝いています。雲一つ無い快晴。妙高が青空の中に浮かんでいます。黒姫が唐松の向こうにあります。全てが青の世界です。

もういい、
妙高と黒姫が美しければ
それでいい
それだけでいい
美しい世界
それは、こんなことをいうのだろう

朝日が見つめられる
何のおもいもなく。

×月×日　　今日も又あの木の上に行きました。黒姫や乙妻高妻、妙高、斑尾山、そしてそのずっと彼方の連山が、白く、黒く、青く光っていました。木の上は、ポカポカ陽が当たってとても気持ちがいい。今度妙高を描きに来ようと思います。あの木の上から、描き続けたい。　小屋の前の植林された林の中を歩きました。太陽が木々の間からこぼれてきます。時々、笹の上の雪が風に揺れて落ちる音がします。鳥が小さな声で鳴いています。ガサガサ、ササー、チチチ　　チチチ、新雪は青く輝いています。見上げると、冬枯の梢の向こうに、青い空と白い山が見えます。　一緒に飲んで楽しい人、一緒にいても気にならない人、気を使わない自分でいられる人と居るのは楽しい、飲むことはなおさら楽しい。山小屋ノートに　人はいろいろなことを書く、ノートによって他人を知る、でもそれは　ただそれだけ、言いっぱなしの、読みっぱなし、対話は生まれない。そしてそれは、横浜の生活とも結びつかない。みんな心の中に、いろいろな思いを抱いている、それをノートに書く、それをノートで読む。でもただそれだけ、丘で、弘明寺で、日ノ出町で、ワンダリングの中で、人はいつもひとり、表面の接触を繰り返す。しらける・・・悪のりする。

ワンゲルの中で何かをすると損をすると感じる、と書いた方。私も、ある合宿で一体自分が何のためにこうしているのか分からなくなりました。みんなと繋がる事が出来たら、あることの為に皆で力を合わせてするという事が無いのです。私は、自分のしたことを認めて欲しいと言っているのではありません。話し合いなどを通じて、今、自分たちが何をしようとしているのかをはっきりさせる必要があると思うのです。それから、下、上級生との繋がりも大事だと思います。　　ワンゲル一人はいろいろな思いを抱いて、部室の扉を開く。今のワンゲルは沈滞しているのだろうか、多くの人は、もうそこに何も夢見ず、期待もせず、いいえ、それ以上に悪いことは、もうそこで、何かを作り出すことを止めてしまっている。人は生きている限り夢を、理想を、こうでありたい、そんな思いを捨てきれずに暮らすのではないだろうか。それが現実の中で求めることが不可能なことを知り、あるいはそれを求めて、それが実現しても何も変わらないんだ、同じなんだと、全てが虚しいと感じたとしても、やはり、心の片隅では、人と繋がりたいとか、自分のやりたい事とかを、心に抱いているのではないだろうか。　ワンゲルーーー一つのサークルとしてーーーに求めるものは、人から与えられるものではない。自分で作り出すものだ。一人で出来なければ二人で、二人でーーー。　　分かった顔をしたあなた、あきらめた顔をしたあなた、本当に分かっているのだろうか。６０人の人間が作っているワンゲル、それは、以前からあったものでもなく、定まった形のあるものでもない。それを動かすのは、一人や少数の人ではない。一人一人の意志と情熱が、作り出すものである。サークルがどのように運営されているのかに、目を向けて欲しい。そして一人一人がサークルを形作って欲しい。　あの事故は、この国大ワンゲルで起きたものです。あの痛ましい事故を二度と起こさず、そして、ワンゲルを実り多いサークルに変えていくことが、残された人の出来ることではないだろうか。　私に何処まで出来るのか、でもがんばります。貴方もやってみて下さい。